

喜界町立喜界中学校3年

喜禎 あさひ

蔵の中央にどっしりと構えるレンガ造りの大きな蒸気窯。長い間、焼酎造りを支えてきた窯は、その役目を終え、今ではまるで、蔵を優しく見守るかのようになっている。

小さい頃から私は、父に連れられ蔵に入る時はいつも真っ先にこの蒸気窯の前に立った。昔の面影が残るこのどっしりと構える姿が無性に好きだったからだ。そして、父からは決まって小さい頃の思い出話を聞かされる。その話の中に度々登場するのが二代目の曾祖父だ。私の家は黒糖焼酎の造り酒屋だ。大正五年創業、今年で百五年を迎える黒糖焼酎の中では最古の蔵だ。私は、二代目の曾祖父に会ったことはない。私が生まれる前に既に亡くなっていたからだ。ただ、不思議と身近に感じ、特に蔵に入るといつも自然に曾祖父を思い浮かべていた。「浩之、醪を見ているか。自分の目でしっかり見て、いいものを造りなさい。」現場を離れ、九十歳を過ぎても、顔を会わせる度に父にそんな声をかけていたという曾祖父は、この言葉からも分かるように、焼酎造りに対して強い信念を持ち、戦中戦後の不安定な時代も、造り手として誇り高く生きた人、そういう印象だ。また、蔵で働く人たちを思い、その暮らしが豊かであるように、常にチャレンジと改革を行う人だったらしい。そして、美味しい焼酎を仕込んだ先には、きちんと酒税を納めること、それが曾祖父の誇りだったと聞いている。

そう、一般的には耳慣れないかもしれないが、お酒には、「酒税」というものが課せられている。その歴史は古く、酒類に課税がなされたのは室町時代だといわれている。それから、さまざまな時代背景と共に改正を繰り返し、現在は、その製造方法などによって四種類に分類され、その租税力に応じて税率を定めているようだ。そして、調べてみると、歴史の中では、酒税が国税の税収第一位となり国を支えた時代があったらしい。そのことから考えても、曾祖父の社会への思いや生き方そして、納税への強い誇りが伺える。蔵にある貯蔵タンクは、同じ形状のように見えるが壁面に記してある容量を示す数字が微妙に違う。父に尋ねると「焼酎一滴一滴に酒税がかかっているため、数リットルの違いでも正確に量らなくてはならない。」と教えてくれた。

父は言う。

「お酒は、生命維持のために必要のないものだが、人と人とが交流し、楽しく生きるためには必要なもの。今、コロナ禍でアルコール業界は厳しい状況ではあるが、終息した後には、また、生活に潤いを与えるいい役目になるはずだ。だから、私たちは、今できることをしっかりやって、その時に備えなければ。」残暑厳しい八月の終わり、父と蔵人たちは、今日も美味しい焼酎造りに励んでいる。そして、曾祖父の思いを受け継ぐその姿を、私はとても誇りに思っている。